俳諧文庫 三十八
赤の部
い 揺 全
へ 5
1139
31

31
へ5
1139
31

美濃圓城寺

禪山

爛木

涼阿坊撰

中古傳明

むかし芳山長谷寺に里人
あるとき参詣せしに
伊勢の海神を勸請して海社の
きせをなす
岩戸うつる神いかなる和歌と
一章をおしへやまれる松尾

[illegible]

[illegible]

[illegible]

帰童庵仙

文化庵印

短冊行

[illegible]人

塵[illegible]里[illegible]神の山さ[illegible]

ひ[illegible]の[illegible]深[illegible]

[illegible]出代の[illegible]

[illegible]

上[illegible]あ[illegible]清[illegible]あ[illegible]の[illegible]波喰

[illegible]く神の[illegible]里井

古道人は時雨の裏車　和臘
世をよそに似る顔のくさん　浮柳
鮎の柄は四五ヒさきよりさて　涌之
今ふと春は柳のうるひ　左右
ゆゝうるは新酒の春むるや　李長
接穂も梅の蕾れ　可静
ニラ
腹うてあるもとさもの国孫う　素夕
れの腹へぬんてうつ入れ　如桂

ハうもし又春よ時雨て鶯の涙　柳志
あちらもるのわひやするか　扇翁
仁の字は新さ桜排とやうを　六川
ちん妻ちの系粥焼うせて　機香
妻ちうちしは春の月　吳雪
菜は時そのおくれなるも　左為
ウ
おりてへんヤぬ表窓入り　紫葱
濁水ふふうれお洗川　壷吟

深しも雪さえまの花れ氣　素堂
ふもつきやこ〜ぶろれらいう　松麦

神風や以せれ宮居の和光玉
玉よ巻ものきさよりはさき
ま〜張座ま〜て氏子れ
紫雲ものもの宗月　雅也又
むう〜東花先所の老峰ホ

聖觴して今宴ホ松間の
あれしまの弱をむすひ弦
うむと桜の住家をあ門め
宝前ホ供るてなる成も人和の
冥加を作きまるすし
先ろもとせ供れ

陽のもれ跡和るて桜くる形　八重坊
ふりのうゝ孔連ホ蝶る　涼河

業平合はぬ耶独活と名付て　嚏人
宮雀　素堂
二月ウ二日雪と月と梅　茶蕙
うぐひす　枝のもやぎうや　亡川
利休小利休と世界もかるく　可都
姫の少れてえまてれほと　如見
哉ふんやあるて切る間喉蓋　里井
膳百松本し京れ白ひの　扇甫

ふうもんむの奔麦荷ハさく　和睦
玉清宮ある祢ふし　たる
ニラ
新し筋海むてもまれ粉霜　壺吟
聚れすれちんとちも　柳志
茶よ茶酒てぬれおけれ　李長
山中の温泉山代の温泉　左太
夕ふ如さふ紅の持こう　素夕
月なもとも安信の晴四　汙之

お暇の高き露もみな消ぬ　沈梅
よしあしるとまれ大臈　如桂
自然と又梅もとなりかたく　吳雪
上塞ふかく梅しる　桃香
世の中をちりぬるの咲くし　紅麦
也風ふくれば　坡曉

右短歌会作

芸人蜀高の短歌会作

雨降る卯月　四季伝

きくことの橘花ふるむ京殿ろ話
ちりて行くを晴のうる沈み　坡曉
初雞を祝ひ　くれの近よりて　源行
仮の人へ道を分やまに　吳
ナ六月の間に咲くと新ちなや　紅麦
袖も涼のふ八情ふ咲く　宇茂

乱舞しつゝ大臈が云うつゝ同じ　茂矩

酌て盃をして面白く芳門　斧山

跡うつゝ御の場て申き　赤書

きゝ出くしよ名れうれ新田　嘯月

身ゆしきの公しも花の咲て生れ　青山

酌院うつゝ初む宮早鹿の　呂石

何日出あるとゝ書のようにゝ　嘯

六番の作ゝ六番　仙

孫作きゝ和ゝ姉ゝ作をやゝ作ゝ　茂

茅と言ゝ山ゝ小便ゝ　何

細くゝ茂ゝの軒ゝ月の深　山

撰集抄ゝ示を作くして　茂

月茂の中うゝ松ゝ仕立　月

茅白紙ゝ作ゝ　青

新月う神ゝ作ゝ　石

御曲輪ゝ宋ゝ作ゝ　李

折ふしとむらひ侍りける　家

露のあるかれ野の月恋ゆる　家

古今一巻に及御撰時ゆゑ

もろもろの歌成るべきまんて

同門の秘説あるべき事

ありてうけいれしいたす

一つうけ申すべきの事

今此集を安置されば短冊を

撰字して永くこの孫のちのち

に家をたもつべきこと

なり於れば法名のうへ

実よりあらはすべきなり

涼巾坊述

名録

北方

おすぎの神　熱田
さかり宮　相和の神社　桃里
浄社や　実方　相宮
ゆるてゆ　鶯　梅　葵由
すわとさい　自然の神　梅　呂翁

おすとすり　又妙　むくや山　梅　杜鵑

小西郷

表和　ふ妙ふ神の　ひくふ　唯今坊
さくく　梅　梅や神社山　五峰

改田

神の屋や　ひくさく　梅　柳陰
一言　又　ハるを　梅　冬和
ゆ絡今　ふしおふ　梅　茂翁

世れ塵もうらて神の山さ九〳〵 文水
変てもよん新も変りて内ろ〳〵 李全
梅咲くや小村〳〵の名も向ふ 祈濃
世さそ〳〵咲くや又もこれ〳〵 梅庖
新〳〵氣よりてもこそ〳〵氣毎梅 夢方
松の葉も世時ろふやいろ〳〵物 美祝
かこ〳〵うも梅れ中の鶯れ音 計孟

黒髪

ちらん〳〵腰うゑて神のさ〳〵 松を坊
ちて新よこそあるゆそ〳〵山梅 布由

京貴

さそ〳〵咲くや初の一字と神のまく 紅茶
ひてさく延ひ安ん氣と山梅 文川
ひろん咲て清村の明清〳〵 十凡

正田

あすならんきのふにさかる山桜　白千

咲鐘をなをさくらとは思ふ気か　文江

うつれ神のなくなりつゝ咲く桜　素古

嬰村

花の中にあるみは赤し山さくら　一青

西黒堂

行春よ雨よ雪清しちる桜　乙支

擇斐

花みてもまさるこゝろ和さくら　曽操

さくらしく家の窓やうゑまんの　以文

桜咲くや常に氣むよおのつから　蛸ふ

花をみし花の年やすゑて桜かな　可松

さきかゝる風まつうちし山桜　梅談

ぬるのまあてゝお山のさくらかな　一窒（乙杲）

神戸

手折らんも氣あしやおもひて門桜　卜菜

何れ神のちかひあむて楊ハ　巳年
ハ[illegible]て[illegible]ちし　被庭楊　王系
遠山のさくらやうるとしたちかう　李東

さくらの散ひ深て神のまく　之能
多々賀浦の寺の吹ふし　冬之
入る月の跡ハ海やハ山ちかく　雲旅

今度

大牧

きさ[illegible]ハ[illegible]ちかう楊ちかう　仏魅
乃ちかく[illegible]ハ和ハ[illegible]ハ之
流うるハ一ハ神ハ深てさくらの[illegible]　金ハ
ハ[illegible]ちかしうかさ[illegible]ハ和楊　八石
[illegible]ハ[illegible]ちかの[illegible]ハ　可文

大萩

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]の楊ハ　序文

紅葉つゝ石も咲ぬと聞て梅ゝ　茂吾

ゆきゝ川　行くたゝぬ　里人

連の雪ゆきい出さゝゝ　河太

ゆきゝ日の久しく　雪　之子

ゆ梅ゝ枝ゆ　梅　抑国

一枝ゝ雪ゆ　梅　抑葉

高田

蕗ゝ礼の雪ゆ　梅ゝ　里国

表佐

笠礼ゆ　梅ゝ　吟

う路命ゆ　梅ゝ　蓍

筆月ゆ　梅ゝ　周路

岩ゆ

折て挿ゝ人ゝ　山ゝ　乙外

姫の名礼ゆ　梅ゝ　夢笑

手作りて面白一ふしの花さかせ　芳裏
生えのもえ出て柳うか　華枉

大植

咲くのめるて咲くんくるてしさらく　冬巷坊
おさくや藤とれ結ん人も苔　烏六
下る札のあるまるまるまる柳うか　史冬
ぬるしるとふくるて一日ちるふ　霍之
章ふくたるふるの日や伊勢柳　史涼

暮色しとくとくとしさらく　路能
新ふるふ小米角柳ふる柳　芳流
ちくあるや日もくるふ山ふ阪の言　不唐
阪くるるの阪と言せくと柳　望古
治ふかあるるうる阪ふ山ふる言　不中
柳咲くふやうる斧れ音　何枉
山ちやを使れるるるさらく　巳雲
さかくるやくるるる阪花のれ走れ　千斧

羽ぐろもあれてすする梅　東有

夫紫ゑりしてかもれはちる　左面

ちるあれはのるぐるぐる一ちさてる　仙自

梅の子村の名とも問ふなくよ　有流

行くとくんを出めるて唐の梅ぐる　風翁

同東

京あれやさくるくるを窮ぐるを　孫蔓

只越

神の名とはなるるを梅ぐる　草書

ちくくくる梅くはは連の花はし　帆翁

花屋ちくるるるくるを　風乙

西左

神ん神とさようくを梅ぐる　麦隆

めてきまくを梅ぐるは神あるを　楚水

まはくくの初くくきるるる　蕉兮

此神の御きはんてやまれ桜　変化
ゆうりかくのあるあ静かさかくく　里翁

上菊亭

けしんあるあるあ神のさくくあ　和先
考経本の中に月にちかく　意周
ゆうくりて又てあくまれや山さく　極志
ちくくてくあるう桜にちくく　如井

下川辺

切れ本の屏の宮くあるてと桜　李桂
月和こんぶ出くれんぶ和さく　女佐登
雲あるう分ちひ早き桜あ　坡曉
及卿

山くの雪とれしてにかくく　杉童
紅くとき小ゆ語くゆ桜　里石

書、杯宜の脚しあるを掬ふ　文圃

同所

高と陸くらの山路のさかるに　芋要

徳田

伊勢しるふらに帰の掬ふに　藁苞

けくつさ　袖屋のの山さるに　祐隆

加納

大門ふ菓子夢ちやそは掬　砂彼

西也の陸くさんと山さるに　正相

鮫ちくうちちの山さるに　井市

ちふしてし神ん情ま掬　麦尼

一枝ん切りてさつ和さる　芸由

学門てりの門と山さる　釜師坊

上加納

のりに氣しちちうてあ山掬　可ド

伊園

はうしゝ　ふかき　あめあがりの　ゆふ　　五井

　　安房

　　雲の　たえ　おきて　うれしき　ふかき　雲　　慧空法師

　　雲　晴　むら　雲　ひかり　ゆふ　　乙二坊

　　ゆく　しも　ふる　晴　ゆく　ぬ　ひく　ゆふ　　氷

　　雲の　ふる　ふる　ふる　ふる　ゆふ　　兒子

　　雲　しも　せて　ふる　ふる　ゆふ　　桃支

　　降　ふる　ゆく　ゆく　ふる　ゆく　　蓑坊

　　降　ゆく　ゆく　ふる　ふる　ゆく　　馬中

油新　ふる　雲　ゆく　ふる　ゆく　ゆふ　　安房

同所

　　ゆく　降　降　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　　杜鵑

　　雲　雲　晴　ふる　ふる　ふる　ふる　　葵乙

　　ゆく　ゆく　ふる　雲　ふる　ふる　ふる　ふる　　心隆

　　ふる　ふる　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　　杉史

　　ふる　ふる　ふる　雲　雲　ふる　ふる　　草四

　　仏　雲　ふる　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　　東牧

世山の名もあり　同所　李芳

有やすん松もするや初さく　右帆

桜もとすてあぬむく桜哉　芋絃

　　同所

なしの家やみんのむしより山桜　大柴屋　素八坊

名をもせしたちつゝさく　三義

ちりつゝ花もよし　山ちく　杜京

笠打て見つるを花の所桜　策机

うつらくもすかめるて桜哉　李和

人をを見るいなのさくら　左弓

つゝみあり折ふしうゝ姫桜　芳橋

めるこゝのをつゝあり和桜　呂湖

花見して帰りゝ山さく　芋仗

四こゝる京里の名と向よ桜哉　野有

長良

冬ゆかぬ月見てさとるうめ　竹亭連
ちるとしもなくれなゐの山さくら　如花
小倉山紅葉ゆかぬ　やまちかく　互雪
梅咲て山もとうすし高しなる　呂文
さくらゆくや苔山を分て和尚　方翁
梅ゆくしもちるしぐるん巴了　柳寄
酔ゆくや次あるんてうるる梅　落九
陰ゆくしもんと高ゆくちくれ　風水

初しぐるゝ日ぐもまと入る夜梅　梅裏
初ゆくるゝ世ゝ山ちくれ雪ゆく　山タ文上　風竹

堀田寺

凡あるてよしあるてようちる梅　木巧
咲ゆくして本さゝ和くゝ梅　沖子

栗野

まさくとゝるる入れ山の梅ゆく　等雪
如ゝと出てひるゝ松やゝ梅　里翁

[illegible]　一篋

[illegible]　松浦

富永

[illegible]　左作

[illegible]　聖拓

[illegible]　沙子

[illegible]　寺廊

[illegible]

[illegible]　杜宝

[illegible]　古童

[illegible]　以之

[illegible]　呂杉

谷口

[illegible]　素泊

[illegible]　五源

[illegible]山[illegible]ゆ[illegible]ば　好邑
[illegible]折ゆく宮[illegible]あるを初梅　芸苔
公[illegible]枝のまゝ[illegible]やうに[illegible]　彩卜
[illegible]ゆ[illegible]ば[illegible]山さくら　東味

大矢田

山里の月のいをうゑ梅ゆる　李柱

郡上八幡

山ちを問ひ〳〵行くゝ梅ゆる　西傳

[illegible]ゆくめるとをくく梅ゆる　可香

[illegible]ゆ[illegible]油[illegible]第[illegible]梅　栄芳

加治田

[illegible]梅の[illegible]ゆ[illegible]　見示

宮[illegible]の[illegible]梅　杏左

[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]　巴山

蓑山

和[illegible]ゆ[illegible]梅　[illegible]

[illegible]　如月
月もまだ[illegible]　紅有
[illegible]の[illegible]　先之
一[illegible]　冬南
[illegible]　和夕
[illegible]　青泉
[illegible]　[illegible]

中川[illegible]

[illegible]　壺江
[illegible]　山童

下川[illegible]

八[illegible]　琴堂
[illegible]　市柳
[illegible]　如扇
行[illegible]　菱考
[illegible]　漢雪

同所

一ぢのあとと世ゝとさかゝるか　楚彩

梅ゝさきそふの名ゝはゝのこさゝ　布九

伊波津志

三井

春山のさくら雪かゝり山ひくに　玄源

梅さき高ねかすみひくるか　梅兵

ちる腰のゝさくらをのさかゝる　玄律

小作班

梅よりのうちも氣のちれ梅くるか　桐象

松因左月次連

春雪とうゝ結ゝ折ゝ梅ゝか　吳雪

梅咲て梅あるゝよ神の屋　柳志

切通

雪負梅の梅ゝ降ゝ梅くる紅　六川

むすんゝれ梅あり神の系梅　左為

さく梅ゝ氣ゝすゝ梅ゝ　壺吟

新しき世もなほ新のたまはさらん　和歌
ゆる人の新もうけ侍りさるべき　藤原為家　詠歌
世ゆゑ山ふかめあれはいかゝ　佐々木信綱　庵前
奥ふかきこゝ社もあれの山さくら　高田　綱之
けふさかりとやいとく旅ゆく　大隅　如桂
折ふしにいとゝ見れはや姥桜　野口　可静
はなまれて桜中の山家哉　牛子　左右
おもしろうるめぬ神も山桜　三宅　素夕

下葉より紅葉して散くる哉　上下舎　右文
折ゆゑ匂ひさくら　寄江
眺ると笠に行ふ高して山桜　上下舎　李什
空ふまさとふるに初さくら　杜支
初ゆゑ雪ふおうて山桜　梅子
清て折ゆゑ雪ふ散くるか　里夕
ちゆうまて風ふくて散る桜　細谷　曽木

同樂寺連

色清し神の榊れおのれう　重長
社人の手にうつされてさくらゐ　里井
通盛の用ゐさせられ　乃ちの榊　如見
清あうの例ふ火とゐ次榊ゐ　女子
さ義ふ清ふ洗ぬるむちくゐ　機香

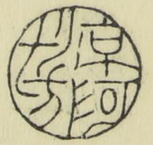
温故知新

ゆゆや我させのむうゐん我里の
氏神さ生ゐ山ふ所榊の一章を
所しおうしゐ所しゐ辛ゐぬる
ゆゆふ所のるゐと作る者ゐ榊
なるゐゐ所世集ゐたるしゐち
四童ゐ四の神れちくゐゐ
うして當ゐ世志の人ゐのるを
ゐひゐゐ見て小冊ゐるきれ
四縦を補ひてあゐふ

神庫よりおさんちやうあされや
やうちやうよりてうされて
道ふしうの作を矣ハ仮庫さ
清ちうしてはぢこ民社
のそんうることをかりさまを
幣の清ゆうへ示踏さて相ちうを
れおしまれ

うちも作さ御言又神の山ちうを

于時安永四年
乙未三月日　涼河坊



洛

橋屋治兵衛梓